

第46回原子力委員会定例会議議事録（案）

1. 日 時 2005年11月22日（火）10：30～10：55
2. 場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室
3. 出席者 齋藤委員長代理、町委員、前田委員
 内閣府
 戸谷参事官、森本企画官、赤池参事官補佐
4. 議 題
 - （1）前回議事録の確認
 - （2）第6回アジア原子力協力フォーラム（FNCA）大臣級会合の開催について
 - （3）長半減期放射性廃棄物（非発熱性）処分技術検討会の構成員について
 - （4）その他
5. 配布資料
 - 資料1 第6回アジア原子力協力フォーラム（FNCA）大臣級会合の開催について
 - 資料2 長半減期放射性廃棄物（非発熱性）処分技術検討会の構成員について（案）
 - 資料3 第45回原子力委員会定例会議議事録（案）
 - 資料4 原子力委員会 長半減期放射性廃棄物（非発熱性）処分技術検討会（第1回）の開催について
6. 審議事項
 - （1）前回議事録の確認

事務局作成の資料3の第45回原子力委員会定例会議議事録（案）が了承された。

(2) 第 6 回アジア原子力協力フォーラム (F N C A) 大臣級会合の開催について

標記の件について、内閣府戸谷参事官より資料 1 に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(前田委員) 円卓討議のトピックスが 2 つあり、 1 つ目の「アジアにおける原子力人材養成に関する協力」は議論するテーマがはっきりしていると思うが、 2 つ目の「科学技術と原子力」は広く漠然とした表現のように思う。何かこういうことを中心に議論しようというものはあるのか。

(戸谷参事官) 現在調整中であり、まだ内容はセットされたわけではないが、そもそも今回こういうトピックスを提案した理由は、ご存知のとおり参加国中、実際に原子力発電を導入しているのは中国、韓国、日本の 3 ヶ国である。ベトナム、インドネシアは導入を検討中だが、大半の国においては、放射線利用あるいは原子力の研究開発が中心である。今回の各国からの出席者も研究技術省や科学技術省といったところの方が多い。従って、そういう科学技術全体の中での原子力の位置付けや、あるいは、原子力においてこれまで行われてきた P A (パブリックアクセプタンス) の活動が、生命倫理の問題など先端の科学技術の導入における最近の問題に関連するところがあることから、原子力で得られた知見なり経験を科学技術行政全般に敷衍していくことについて議論することもあるのではと考えている。

(齋藤委員長代理) ということは F N C A の位置付けも変わっていく可能性もあるということか。

(戸谷参事官) F N C A はあくまでも原子力での協力を行うものであり、その位置付けを今回変更する必要は無いと思う。また、これまでの F N C A のカントリーレポートを見ても、マレーシアやフィリピンは、科学技術全般から入って行って、それから F N C A についてコメントするという書き方をしている。全ての参加国がそうではなく、オーストラリア、中国、タイからの出席者は原子力プロパーの機関の方々だが、そのタイの昨年のカントリーレポートでも、科学技術全体の戦略の中での原子力の位置付けから始まっていたと思う。これらの実情も踏まえて、 1 度そういった切り口の議論をする価値があるのではないかと考えている。

(齋藤委員長代理) 今回 1 度ご議論いただいて、その開催結果の報告の際に議論すべきことかもしれない。

(町委員) 我が国でも J - P A R C (大強度陽子加速器) など基礎的な分野における原子力技術の利用が重要となってきたので、各国が一遍にそこまで行けるわけではないが、科学技術の基礎的な分野にアイソトープや加速器を利用することについて議論し、大臣等の考え方を聞くのがよいのではないかということである。

(前田委員) こういうテーマで議論すると、これからの協力の分野が広がる可能性もあるということか。

(町委員) そうということになると思う。

(戸谷参事官) F N C A は本来原子力での協力を行うものであり、もしもここで話が広がり、科学技術政策全般の議論をすべきということになれば、また別の場で議論する可能性も含めてご相談させていただくことになると思う。ただ、このように新しい切り口で議論するので、どのように発展していくかは実際にやってみないとわからないと思う。

(齋藤委員長代理) 「アジアにおける原子力人材養成に関する協力」は前回に引き続いて取り上げられるテーマである。この1年間、どれだけこの課題について進捗したのか。また、なぜ2回続けてこれを取り上げることになったのか。

(戸谷参事官) 資料1の1ページにこれまでのテーマが書かれており、齋藤委員長代理が言われたように、前回の第5回大臣級会合で、人材養成が全体の基調テーマ及び円卓討議の1つのテーマとして取り上げられた。このときはベトナムからアジア原子力大学構想が提案され、サマリーの中では、上級行政官レベルの会合で検討して次回の大臣級会合に報告すべしということになった。その後、人材養成ワークショップがベトナムで開催され、この中でコーディネーターレベルはある一定の成果が出ている。これを今回の大臣級会合の円卓討議の場でご紹介し、今後具体的に活動を展開していくかについてご判断をいただくということを用意している。

(齋藤委員長代理) 原子力大学構想は進展するのか。

(戸谷参事官) 内容についてはあまり詳細にご説明しないが、現時点では具体的に各国で協力できる範囲で行おうということで、現実的な案を調整しているところである。

(町委員) ベトナムで行われた前回の人材養成ワークショップでは、大学という名前は実態にあまり即さないのではないかと、学位の授与にはこだわらず、有用な研究者や原子力発電に役立つ技術者を養成することにニーズがあるのではないかと、このこと、「アジア原子力訓練・教育プログラム」という名前を提案することが合意されている。もう1つ大事なことが、F

N C A 全体がそうだが、このプログラムについても、パートナーシップに基づき、各国がそれなりのものを提供・貢献し、各国の訓練・教育プログラムをネットワークで結ぶなど協力して人材養成に取り組もうという合意がなされた。今回はこういったことが大臣レベルまで上がり、コミットメントがどこまでなされるかということである。

また、今回特徴的なのは各国の参加者が多いことであり、非常に熱意が感じられる。我が国は、各国の大臣とあと1名ないし2名の旅費を出すのみであり、特に韓国には全く出さず、自費で参加していただく。それでも多くの方が、しかもかなりハイレベルの方が来るので、F N C A に対する期待が高まっているのではないかと思う。

(戸谷参事官) オーストラリアにも旅費を出していない。

(齋藤委員長代理) 日本に来て発電所や研究所などを視察する予定はあるのか。

(町委員) マレーシアと中国はそういった予定がある。

(齋藤委員長代理) それでは、本件については会合が成功に導かれることを期待したい。

(3) 長半減期放射性廃棄物(非発熱性) 処分技術検討会の構成員について(案)

標記の件について、内閣府森本企画官より資料2に基づいて説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(齋藤委員長代理) この技術検討会の検討内容等については以前の定例会議で既にご了解いただいております。構成員はこの案でいかがかということである。この技術検討会のスケジュールはどのようになっているのか。

(森本企画官) 最終的には技術検討会の審議によるが、第43回原子力委員会定例会議で決定いただいたときにご説明したように、現在想定しているスケジュールでは、来年2月に原子力委員会に報告いただき、それから原子力委員会が一般からの意見を公募をし、その後必要に応じて技術検討会へ対応を指示するという予定である。

(齋藤委員長代理) 技術検討会にはご専門の立場からご検討いただき。原子力委員もなるべくオブザーバーとして出席し、審議の成り行きを聞かせていただくことになるかと思う。異論がないようなので本案にて決定させていただきます。

(4) その他

- ・ 事務局より、11月29日(火)に次回定例会議が開催される旨、報告があった。
- ・ 事務局より、11月28日(月)に原子力委員会 長半減期放射性廃棄物(非発熱性)処分技術検討会(第1回)が開催される旨、報告があった。